

# 説一切有部における表 (vijñapti) の構造

清水俊史

〔抄 録〕

本稿は、説一切有部における表 (vijñapti) と等起 (samutthāna) との関係を中心に考察を進め、身語の行為がどのように引き起こされ殺生や盗みといった行為を成立させているか、という問題を検討する。結論として、表 (vijñapti) の解釈にはAKBh. を挟んで教理的展開が見られる点を指摘し、展開以前以後における行為の構造を示した。

キーワード 表業、因等起、刹那等起、業

## 0. 問題の所在

仏教では業を身・語・意の三種に分類する。この三業の分類は、既に初期經典中に説かれるが、その解釈を巡って部派間で大きな相違がみられる。上座部では身・語・意の三業とも精神的要素であると解釈し、その本質は思 (cetanā) であるとする。有部では、意業は思 (cetanā) であり精神的要素であるが、身語業は物質的要素であると解釈される。この身語業は、それぞれさらに表 (vijñapti) と無表 (avijñapti) との二つに分けられる。このうち身表は「形色」であり、語表は「音声」であり、殺人や命令といった身語の業道のうち肉体的行為を構成する要素である<sup>(1)</sup>。残る無表 (avijñapti) は、主に妨害妨悪の効力をもつ戒として理解されている。

従来の有部における業の研究は、無表 (avijñapti) については数多く発表されているが、表 (vijñapti) については舟橋一哉 [1954]；工藤道由 [1983]；塚田康夫 [1985]；松島央龍 [2009] らが『俱舍論』を中心とした限られた資料を用いて研究するにとどまっており、有部内における教理展開については未だ検討されていない。また、身語による行為の基本的構造については、すでに舟橋一哉 [1954：p. 84 図] によって、一刹那の表 (vijñapti) がどのように起こされるかについては図示されているが、多刹那にわたる行為がどのような構造をもつかについては考察の対象となっていない。そこで本稿は、有部論書を網羅的に検討し、多刹那にわたる行為の構造と、その教理的展開との解明を目的とする<sup>(2)</sup>。

## 1. 有部における表 (vijñapti) の定義と理解

### 1. 1. 表 (vijñapti) と継続的行為

本項1. 1.では、身語による継続的な行為と、表 (vijñapti) との関係について考察する。表 (vijñapti) は、殺生や盗みといった時間的継続性のある肉体的行為を構成しているが、一つの表 (vijñapti) が多刹那にわたって存続し行為を完成させるわけではない。AKBh. (p. 194.11-13) における有部の主張によれば、有為法はすべて刹那滅であるから、それが多刹那にわたって存続しつつ移動することはありえず、あたかも「動いている」ように見えるのは、一刹那一刹那ごとに諸存在が生滅を繰り返している事象を錯覚しているにすぎないと述べている。したがって刹那に生じては滅する表 (vijñapti) が「村から村へ移動」などといった時間的継続性のある行為全てを完成させることはできない。

多刹那にわたる行為を遂行する場合、各刹那ごとに表 (vijñapti) が生じてその行為を維持していることは、AKBh. (pp. 210.19-211.4) における表 (vijñapti) の成就に関する議論から明瞭に知ることが出来る。それによれば、善・不善・無記の表 (vijñapti) が遂行されている間は、現在の表 (vijñapti) が成就されていると述べられている<sup>(3)</sup>。また、舟橋一哉 [1954 : p. 80.8-15] は、表 (vijñapti) と同時刹那に刹那等起なる心が生じていなければならない点を指摘している。したがって、なにかしらの継続的行為が遂行されている背後には、その行為を維持する表 (vijñapti) と、その表 (vijñapti) を起こしている心が絶えず生滅を繰り返していることになる。

### 1. 2. 身語の表 (vijñapti) と心

続いて本項1. 2.では、表 (vijñapti) の法相的性格を検討し、有部における理解を探る。有部において身語表は物質的要素であり、色蘊に収められる<sup>(4)</sup>。しかし、色蘊が存在したとしても、かならず表 (vijñapti) が存在するわけではない。AKBh. (p. 201.14-15) ; AKVy. (p. 361.26-28) によれば、尋・伺の心によって表 (vijñapti) が引き起こされるため、有尋有伺地である欲界と初静慮にのみ身語表が存在するとされる。

なお、無尋有伺地である中間静慮は初静慮に含まれるとされるので、中間静慮にも身語表が存在すると考えられる<sup>(5)</sup>。尋・伺の二心所は不定地法であるが、尋は初静慮以下において、伺は中間静慮以下において、善・不善・無記すべての心と相応して起こる<sup>(6)</sup>。ただし AKBh. (pp. 201.23-202.4) によれば、そのなかでも欲界および初静慮における修所断心のみが表 (vijñapti) を起こす能力をもつとされる。

ここで重要なことは、見所断心によっては表 (vijñapti) が起こされないという点である。この理由として AKBh.は「見所断心は内門転 (すなわち内省的な思惟) であるから、外部に働きかけて表 (vijñapti) を起こすことは出来ない」と述べているが、これには問題がある。

実際、「邪見によって邪語・邪業が生じた」と説く初期經典が存在し<sup>(7)</sup>、邪見など見所断煩惱によって身語の動作が引き起こされることは不自然な事態ではない。おそらく、見所断心が表 (vijñapti) を起こせないとする最大の理由は、見所断心によって表 (vijñapti) が起こされるならば、表 (vijñapti) も見所断ということになってしまうためであろう。AKBh.によれば<sup>(8)</sup>、身語表は無明 (avidyā) や明 (vidyā) と矛盾するものではないので、それらは見所断ではなく、修所断だけであるとされるからである。以上より次の三点が指摘される。

1. 身語の表 (vijñapti) が存在するのは欲界と初静慮のみ。
2. 有尋有伺の修所断心によって、身語の表 (vijñapti) が起こされる。
3. 見所断心は内門転であるから、身語の表 (vijñapti) を起すことは出来ない。

### 1. 3. 二種の等起 (samutthāna)

次に本項では「表 (vijñapti) の善・不善・無記の三性が、どのようにして決定されるのか」という点を考察する。有部では、善・不善の色蘊が存在することを認めているが、自性として善・不善が色蘊に具わっているとは理解せず、身語表を等起させる心に従って身語表の善・不善・無記の三性が決定されると理解している。このような色蘊が善あるいは不善となる根拠として、「等起」(samutthāna) という教理を有部は組織している<sup>(9)</sup>。この等起については舟橋一哉 [1954: pp. 76.1-98.6] による先行研究があるが、『俱舍論』のみを研究対象としている。そこで、本項ではそれ以外の論書も含めて検討を加える。この等起には因等起と刹那等起の二種類があるとされ、次のように定義されている。

AKBh. (p. 203.12-15) :

samutthānaṃ dvidhā hetutatkṣaṇotthānaśaṃjñitam / (4, 10ab)  
 dvidvidhaṃ samutthānaṃ hetusamutthānaṃ tatṣaṇasamutthānaṃ ca / tatraiva  
 kṣaṇe tadbhāvāt /  
 pravartakaṃ tayor ādyam dvitīyam anuvartakam // 4, 10cd //  
 hetusamutthānaṃ pravartakam ākṣepakatvāt / tatṣaṇasamutthānaṃ anuvartakaṃ  
 kriyākālānuvartanāt /

等起は二種類である。因〔等起〕と刹那等起と名付けられたものである。(4, 10ab)

因等起 (hetusamutthāna) と刹那等起 (tatṣaṇasamutthāna) という、二種類の等起がある。まさにその刹那にそれ (表) があるから〔刹那等起である〕。

二つの〔等起の〕うち、初めのものは能転 (転じさせるもの) であり、第二のものは随転 (随い転じさせるもの) である。(4, 10cd)

因等起は、〔作業を〕引発させるものであるから能転 (pavartaka) である。刹那等起は、作業 (kriyā) の時に引き続き生起させる (anuvartana) ゆえに随転 (anuvartaka) である。

したがって、何らかの行為を起こす場合、まず因等起によって作業 (kriyā) が引き起こされ、刹那等起によってその作業が維持されと考えられている。このような因等起の役割を担う心を能転心といい、刹那等起の役割を担う心を随転心という。また AKBh. と AKVy. は、実際の作業 (kriyā) に対する、因等起と刹那等起との役割について次のように述べている。

AKBh. (p. 203.16) :

kim idānīm tasya tasyāṃ kriyāyāṃ sāmāthyam / tena hi vinā 'sau mṛtasyeva na syād ākṣiptā 'pi satī /

【問】この場合、それ（刹那等起）には、その作業に対してどのような機能があるのか。

【答】実にそれ（刹那等起）が無ければ、この〔表〕は、たとえ引発されていても、死者の〔表の〕ように、存在しないだろう。

AKVy. (pp. 364.31-365.1) :

**tena hiti vistaraḥ. tena hi tatkaṣaṇasamutthānena vinā asau vijñaptir mṛtasyeva na syād ākṣiptā satī** hetusamutthānena janitāpi satī. tadyathā. kaścīd grāmaṃ gamiṣyāmīty ākṣiptakriyāntarā mriyet. tasyānuvartakacittābhāvād (p. 365) gamanaṃ na bhavati. tadvat.

「実にそれ（刹那等起）が」云々とは、「実にその刹那等起が無ければ、この表 (vijñapti) は、因等起によってたとえ引発されてても〔すなわち〕生ぜしめられていても、死者の〔表 (vijñapti) の〕ように、存在しないだろう」ということである。たとえば、ある者が「村へ行こう」と引発された作業の途中で死ねば、その者には随転心がないので [365] 行くことがないが、それと同じである。

すなわち「村へ行こう」という作業 (kriyā) は、能転心という因等起によって引き起こされ、随転心という刹那等起によって表 (vijñapti) が起こされ維持される。この上訳の議論だけでは釈然としないが、『大毘婆沙論』巻195 (T27. 975c09-11)；『順正理論』巻36 (T29. 547a08-10) の記述から、この能転心は作業、すなわち表 (vijñapti) が起こるよりも時間的に先に存在してその作業を引発し、作業のあいだは随転心が表 (vijñapti) を起こして時間的継続性のある行為を維持しているものと考えられる<sup>(10)</sup>。因等起・刹那等起の作業 (kriyā) に対する役割を表にまとめれば次のようになる。

	能転/随転	作業に対する役割
因等起	能転心	作業より先に存在し、作業を引發する。
刹那等起	随転心	作業のあいだ表(vijñapti)を起して維持する。

#### 1. 4. 能転心と随転心

続いて本項では、能転心と随転心の法相的性格に検討を加える。まず、前項1. 3.までに次の四点を確認した。

1. 欲界・初静慮における修所断心によって表(vijñapti)は起こされる。
2. 表(vijñapti)の善・不善・無記の三性は、それを等起させている心の三性に従う。
3. この等起には能転心である因等起と、随転心である刹那等起との二種類がある。
4. 因等起は作業を引發し、刹那等起は作業を維持させる役割がある。

ところで、表(vijñapti)の善・不善・無記の三性は、それを等起させている心の三性に従い、さらに表(vijñapti)は修所断心のみによって起こされるから、次のような関係が思い浮かぶかもしれない。すなわち「有部では“修所断心のみによって表(vijñapti)が起こされる”と理解しているのだから、表(vijñapti)もその修所断心によって等起されて、その善・不善・無記なる三性が決定されるのではないか」と。たしかにこのように考えれば、非常にシンプルに表(vijñapti)と、それを起こさしめる心との関係が説明できるのであるが、有部はそのように理解せず複雑な解釈を施す。この原因は、見所断心は能転心(因等起)となりうるからである。どのような心が能転心および随転心になるのかについて、有部論書の見解をまとめると次のようになる<sup>(11)</sup>。

	見所断心		修所断心		無漏心		異熟生心	
	意識	五識 <sup>(12)</sup>	意識 <sup>(13)</sup>	五識 <sup>(14)</sup>	意識	五識 <sup>(15)</sup>	意識	五識
能転心	○		○	—	—		—	—
随転心	—		○	○	—		△	△

△＝衆賢は認める。

見所断心は、能転心(因等起)にはなるが、随転心(刹那等起)にはならないので、実際に表(vijñapti)を起こすことは出来ない。これは前項1. 3.において確認した「表(vijñapti)は修所断心によってのみ起こされる」という有部の理解とも一致している。従って、見所断心によって「何かをしよう」と行為が引き起こされることはあるが、見所断心が実際の動作を生み出すことは出来ない。すなわちこれは、見所断心が能転心となって行為を引き起こして表(vijñapti)に対し因等起となりうるが、随転心となって行為が遂行されている同時刹那に存在して表(vijñapti)に対し刹那等起となることは出来ない、という意味である。このような

AKBh.に説かれる法相定義は、『大毘婆沙論』巻117 (T27. 610a05-c10)；『雜心論』巻3 (T28. 896c27-897a17) の段階から見出すことが出来る。

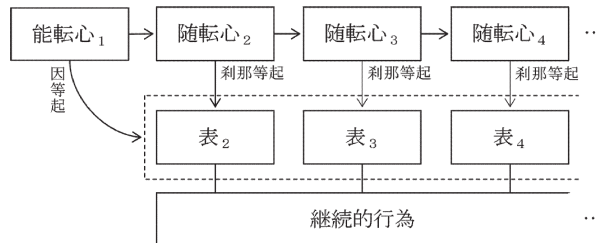
一方、『順正理論』巻36 (T29. 546c28-547b29)；『藏顯宗論』巻19 (T29. 864c09-865a25) において衆賢は、見所断心が随転心となりえないと理解する点は AKBh. などと同一であるが、修所断心と異熟生心については異なる解釈を施している。衆賢の理解によれば、修所断の意識のうち漏定心は能転心・随転心となりえず、修所断の意識のうち散心のものだけになりえろとし、また、異熟生心は随転心となりうろとしている。

### 1. 5. 表 (vijñapti) の基本的構造

前項1. 4.までに、表 (vijñapti) と、表の三性を決定づける「等起」(samutthāna) について考察し、次の三点を確認した。

1. 「村へ行く」などの時間的継続性のある行為は、能転心である因等起によって引き起こされる。
2. その後、随転心である刹那等起によって表 (vijñapti) が起こされ、その行為が維持される。
3. 見修所断の意識が能転心となりうる。修所断心が随転心となりうる。

この三点は、有部の表 (vijñapti) の基本的構造を明らかにしている。これをもとに、能転心・随転心と時間的継続性のある行為との関係を図示すれば次のようになるだろう。



上図<sup>(16)</sup>は能転心1によって何らかの行為が引き起こされ、その行為が遂行されているあいだ、随転心<sub>2-4</sub>が表 (vijñapti) を等起させ、その行為を維持していることを示している。なお、この基本的構造が明瞭な形で説かれるのは『雜心論』『大毘婆沙論』からであるが、その祖形は『心論』『心論経』において読み取ることが出来る<sup>(17)</sup>。

## 2. 表 (vijñapti) の構造の教理的展開

前節1.において、「等起」(samutthāna) という点から、どのように表 (vijñapti) が引き起こされ、行為が遂行されるのかについて考察し、身語による行為の基本的構造を検討した。続



いて本節では、能転心と随転心との関係を中心に考察し、有部内における表 (vijñapti) の構造の教理的展開を検討する。

有部論書を検討すると、「能転心の善・不善・無記の三性に、随転心も従うのかどうか」という問題が議論されており、論書によって解釈が異なる。それをまとめると次のようになる。なお、本節では、「随転心の三性は、能転心に従う」という説を〈三性決定説〉と名づけ、「随転心の三性は、能転心に従うとは限らない」という説を、〈三性不定説〉と名づける。

	随転心の三性	採用する資料
三性決定説	能転心に従う。	『大毘婆沙論』・『雜心論』
三性不定説	能転心に従うとは限らない。	AKBh.・『順正理論』・『藏頭宗論』

よって、AKBh.より前の論書では〈三性決定説〉が説かれ、それ以後の論書では〈三性不定説〉が説かれていることが解る。

## 2. 1. 『大毘婆沙論』『雜心論』 — 〈三性決定説〉 —

まず、「随転心の三性は、能転心に従う」という〈三性決定説〉を主張する資料から検討する。『大毘婆沙論』と『雜心論』には次のように説かれている<sup>(18)</sup>。

『大毘婆沙論』巻117 (T27. 610b01-04) :

此中若善心作能轉。即善心作隨轉。若染汚心作能轉。即染汚心作隨轉。若威儀路心作能轉。即威儀路心作隨轉。若工巧處心作能轉。即工巧處心作隨轉發身語業。

此の中、若し善心が能転と作れば、即ち善心が随転と作り、若し染汚心が能転と作れば、即ち染汚心が随転と作り、若し威儀路心が能転と作れば、即ち威儀路心が随転と作り、若し工巧處心が能転と作れば、即ち工巧處心が随転と作りて身語業を發す。

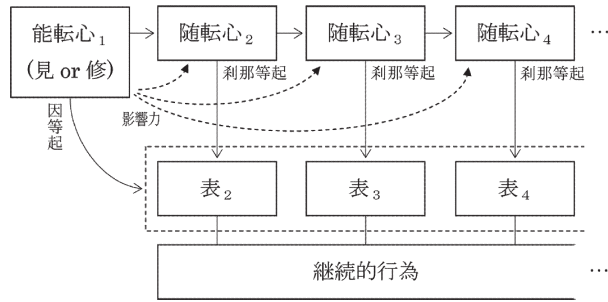
『雜心論』巻3 (T28. 897a03-04) :

彼亦善不善無記。彼善轉即善隨轉。不善無記亦如是。

彼 (能転心) には亦、善・不善・無記あり。彼 (能転心) の善の転ずるとき、即ち善が随転す。不善・無記も亦是の如し。

従って、能転心が随転心に影響を与え、その善・不善・無記の三性を決定づけると考えられている。これを図示すれば次のようになる<sup>(19)</sup>。

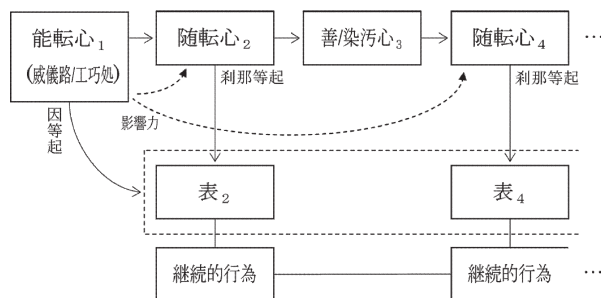
この説をとる場合、能転心が善であるならば、行為を遂行するあいだ、ずっと善の随転心が生じていなければならないことになる。しかしながら現実の行為を顧みると、たとえ善心で「何かをしよう」と決意して行為を起こしても、その行為のあいだに不善心や無記心が生じる



ことは十分にあり得ることである。これについて『大毘婆沙論』および『雜心論』では、「どこかへ行こう」とか「絵を描こう」と無記の能転心<sup>(20)</sup>が行為を引き起こしても、その途中で仏像を見たり描いたりすれば善心が起ることもあり、女性を見たり描いたりすれば染汚心を起こすこともあるのではないかと、という問題が提起されている。これらの問題に対し『大毘婆沙論』巻117 (T27. 610b05-23) は、二つの解釈を紹介している。

まず、世友に帰せられる第一説によれば、心は非常に速く刹那刹那に次々と生じては滅している、あたかも無記の行為を遂行しているあいだに善心や染汚心が生じているように錯覚してしまうが、厳密には善心や染汚心が生じている刹那において、その行為は遂行されていないとしている。従ってこの理解によれば、行為を遂行するあいだに、能転心とは異なる三性の心が生じて、それは随転心として表 (vijñapti) を起こし行為を維持しているわけではないことになる。この解釈は、法救の『雜心論』巻3 (T28. 897a03-04) にも説かれる。この第一説を図示すれば次のようになる。

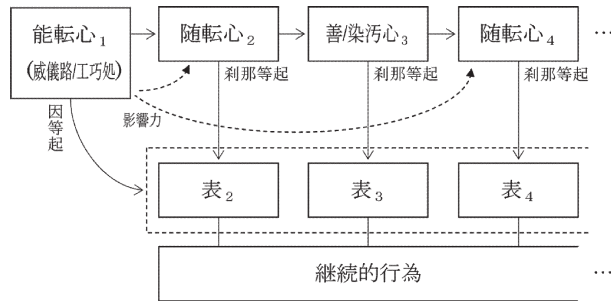
#### 【第一説 (世友・法求)】



次に第二説によれば、威儀路と工巧処との無記心が能転心となった場合にのみ、例外的に善・染汚・無記との三種の随転心が起ることがあるとされる。この第二説を図示すれば次のようになる。



【第二説】



このように〈三性決定説〉をとる場合には、能転心によって随転心の三性が決定づけられる。しかし、その場合、「威儀路や工巧処の無記心によって引発された継続的行為のあいだにも、善心や不善心が起きることがある」という矛盾を説明することが困難になり、諸論師により会通が施されている。

2. 2. 『俱舍論』以後 — 〈三性不定説〉—

続いてAKBh. および『順正理論』『藏頭宗論』に説かれる「随転心の三性は、能転心に従うとは限らない」という〈三性不定説〉を検討する。これらの資料によれば「たとえ能転心が善であっても、随転心が不善・無記となる場合もある」と、次のように述べられている。

AKBh. (p. 204.11-14) :

kiṃ khalu yathā pravartakaṃ tathaiṅānuvartakaṃ bhavati / nāyam ekāntam /  
pravartake śubhādaḥ hi syāt tridhā 'py anuvartakam / (4, 12ab)  
kuśale pravartake kuśalākuśalāvyākṛtam anuvartakaṃ syāt / evaṃ akuśale  
cāvyākṛte ca /

【問】実に、能転と同じように随転もあるのか。【答】これは断定できない。

実に能転が浄 (śubha) などである場合、随転は三種すべてである。(4, 12ab)  
能転が善である場合、随転は善・不善・無記である。〔能転が〕不善と無記との場合も、同様である。

『順正理論』巻36 (T29. 547b29-c03) = 『藏頭宗論』巻19 (T29. 865a25-28) :

轉隨轉識性必同耶。不爾。云何。謂前轉識若是善性。後隨轉識通善等三。不善無記為轉亦爾。

【問】転と随転との識の性は必ず同じきや。【答】爾らず。【問】云何ぞ。【答】謂く、前の転の識、若し是れ善性ならば、後の随転の識は善等の三に通ず。不善と無記との転を為すも亦爾り。

この〈三性不定説〉は、『大毘婆沙論』や『雜心論』で採用されている〈三性決定説〉よりも、現実に即した理解であるといえる。現実には、無記心によって「何かをしよう」と行為を引き起こしたとしても、その行為を遂行するあいだ常に無記心であるとは限らず、善心や不善心を起こしてもおかしくないからである。従って、この〈三性不定説〉を採用するならば、〈三性決定説〉を採用した場合に生じる「威儀路や工巧處の無記心によって引発された行為のあいだにも、善心や不善心が起きることがある」という矛盾を説明する必要がなくなる。しかし、この〈三性不定説〉の立場をとる場合には、それとは別の新たな問題が起こってくる。

## 2. 2. 1. 表 (vijñapti) と等起 (samutthāna) を巡る議論

続いて〈三性不定説〉の立場をとる場合に起こる問題点と、その解決方法を考察する。有部では表 (vijñapti) の三性を決定させる基準として、因等起と刹那等起という二種類の基準を設けているが、〈三性不定説〉を取る場合、「果たして表 (vijñapti) の三性は、どちらの等起に従うのか」という問題を解決しなければならない。

『大毘婆沙論』や『雜心論』のように、能転心と随転心の三性が必ず一致するという立場をとるならば「表 (vijñapti) の三性は、能転心の因等起に従うのか、それとも随転心の刹那等起に従うのか」と議論する必要はほとんどない。なぜなら、必ず一致するからである。しかし、能転心と随転心の三性が必ずしも一致しないという立場をとる AKBh. などでは、表 (vijñapti) の三性が、どのようにして決定されるのか説明する必要がある。

これが議論される背景には、次のような場合を合理的に説明する必要性があったためであると思われる。すなわち、善なる能転心によって具足戒を受けようと行為を引き起こしたにもかかわらず、その具足戒の作法が完成する瞬間に、何らかの原因で随転心が不善や無記だった場合の説明である。そのような場合、もし随転心の三性によって表 (vijñapti) の三性も決定されるならば、具足戒の完成した瞬間の表 (vijñapti) も不善や無記になってしまい、その結果、受戒という聖なる作法が「悪業」という矛盾に陥ってしまう<sup>(21)</sup>。しかし、能転心の三性に表 (vijñapti) も従うとするならば、今度は法相上の矛盾が生じる。なんとすれば、能転心には見所断心や無覆無記心も含まれるため、「見所断の表 (vijñapti)」とか「欲界繫の有覆無記の表 (vijñapti)」というような、法相上許されない表 (vijñapti) が存在することになってしまう<sup>(22)</sup>。

この問題に対する AKBh. の議論をみる。まず、表 (vijñapti) の三性が能転心と随転心のどちらに従ったとしても矛盾が起きるとして、対論者が次のように述べている。

AKBh. (p. 205.2-6) :

kim idānīm yathā pravartakam tathā vijñaptir āhosvid yathā 'nuvartakam /  
kim cātaḥ /

yathā pravartakam cet / ihāpi nivṛtāvyākṛtā vijñaptiḥ prāpnoti /  
 satkāyāntagrāhadrṣṭipravartitatvāt / na vā sarvaṃ darśanaprahātavyaṃ pravarta-  
kam iti viśeṣaṇaṃ vaktavyam / yathānuvartakam cet akuṣālvāvyākṛtacittasya  
 prātimokṣavijñaptiḥ kuśalā na prāpnoti /

【問】さてこの場合、能転と同じように表 (vijñapti) があるのか、或は、随転と同じように〔表 (vijñapti) があるのか〕。

【徴】また、それから如何なる〔過失〕があるか。

【難】(A) もし、能転と同じように〔表 (vijñapti) がある〕ならば、ここ (欲界) においても有覆無記の表 (vijñapti) があることになる。有身〔見〕と辺執見とによって転ぜられるからである<sup>(23)</sup>。あるいは「すべての見所断〔の心〕が能転であるのではない」と  
区別が説かれるべきである。(B) もし、随転と同じように〔表 (vijñapti) がある〕ならば、不善・無記の心をもつものにとって、別解脱〔律儀〕の表 (vijñapti) は、善ではなくなってしまう。

AKVy. (p. 367.7-14) :

**na vā sarvaṃ darśanaprahātavyaṃ pravartakam** iti. syād etad evaṃ. yadi sarvaṃ darśanaprahātavyaṃ pravartakam iṣyeta. na tu sarvaṃ. kiṃ tarhi. mithyādrṣṭyādīkam eva pravartakam vijñapter na satkāyadrṣṭyādīkam ity ata āha. **na vā sarvaṃ iti viśeṣaṇaṃ vaktavyam** idrṣaṃ pravartakam idrṣaṃ neti. **akuṣālvāvyākṛtacittasyeti.** upasaṃpādyamānasya kenacid yogenākuṣālvāvyākṛtacittasya. prātimokṣasamvaravijñaptir aṃjalyādīkā kuśalā na prāpnoti. tadanuvartakacittam akuṣālvāvyākṛtam iti kṛtvā.

「あるいは「すべての見所断〔の心〕が能転であるのではない」とあるが、もし、すべての見所断〔の心〕が能転であると認められれば、〔欲界にも有覆無記の表 (vijñapti) が存在するという〕それはその通りになるであろう。けれども、すべて〔の見所断心が能転となるわけ〕ではない。【問】その場合どうなのか。【答】「邪見などのみが、表 (vijñapti) にとって能転となるが、有身見などはそうではない」と、それゆえに「あるいは「すべての…ない」と」と説かれたのであり、「このようなものは能転であり、このようなものはそうではない」と区別が説かれるべきである。「不善・無記の心をもつものにとって」とは、具足戒を受けようとしていて、何らかの事情で不善・無記の心をもつ者にとっては、合掌などの別解脱律儀の表 (vijñapti) が、善ではなくなってしまう。「その随転する心は、不善あるいは無記である」と〔解釈〕してである。

ここで述べられている問題点をまとめれば次のようになる。

能転/随転	問題点
(A) 表は能転心に従う	欲界に存在すると認められる有身見と辺執見と相応する見所断の有覆無記心が能転心となった場合、有覆無記の表(vijñapti)が欲界にも存在することになるが、その存在は法相上認められてない <sup>(24)</sup> 。
(B) 表は随転心に従う	具足戒が完成する刹那に無記心あるいは不善心が起れば、刹那等起による具足戒の表(vijñapti)も、無記あるいは不善になってしまう。

この論難に対して AKBh. は、(A)「表は能転心に従う」という説をとり、上記の問題点について次のように回答している。

AKBh. (p. 205.6-10) :

yathā pravartakam tathā vijñaptir na tu yathā darśanaprahātavyam / bhāvanā-heyāntaritatvāt / yadi nānuvartakavaśād vijñapteḥ kuśalāditvam na tarhidaṃ vaktavyam / hetusamutthānaṃ saṃdhāyoktam sūtre na tatksaṇasamutthānam / ato nāstīha nivṛtāvyaḥkṛtā vijñaptir iti / evaṃ vaktavyam / anyavyavahitaṃ hetusamutthānaṃ saṃdhāyoktam iti / avasitaḥ prasaṅgaḥ /

【答】能転と同じように、そのように表 (vijñapti) はあるのだが、しかし見所断〔である能転の心〕と同じように〔そのように表 (vijñapti) が設定されるのでは〕ない。修所断〔の心〕が間に入るからである。もし随転〔心〕によって、表 (vijñapti) が善などとなるのではないならば、その場合、次のことは説かれるべきではない。「經典では、因等起について説かれたのであり、刹那等起に〔ついて説かれたのでは〕ない。それゆえに、ここ（欲界）において有覆無記の表 (vijñapti) はない」と。〔そうではなくて〕次のように説かれるべきである。「他〔の心〕によって隔てられた因等起について説かれたのである」と。傍論が終わった。

AKVy. (p. 367.14-25) :

**yathā pravartakam** iti vistaraḥ. yathā pravartakam cittam bhāvanāprahātavyam. **tathā vijñaptir** vyavasthāpyate. **na tu yathā darśanaprahātavyam** pravartakam tathā vyavasthāpyate. kasmāt. **bhāvanāheyenāntaritatvāt**. yasmāt tatpravartakam darśanaprahātavyam bhāvanāheyena pravartakenāntaritaṃ. katham kṛtvā. tadyathāsty ātmeti mayā pareṣāṃ gamayitavyam iti pūrvam evāvadhārya tato vāk-samutpādakena cittena bahirmukhapravṛttena bhāvanāprahātavyena savitarkeṇa savicāreṇa vācam bhāṣate. asty ātmetyevamādi. ato **yathā pravartakam** iti vistaraḥ. tad evaṃ avaśyaṃ darśanaprahātavyasya pravartakasyānantaram pravartakam eva bhāvanāprahātavyam kuśalam akuśalam avyākṛtaṃ cotpadyate.

tadvaśāc ca vijñaptēḥ kuśalāditvam iti. **evaṃ tu vaktavyam** iti vistaraḥ. **evaṃ tu vaktavyam anyavyavahitaṃ bhāvanāheyavyavahitaṃ hetusamutthānaṃ saṃdhā-yoktam** iti. paraṃparāhetusamutthānaṃ saṃdhāyety arthaḥ.

「能転と同じように」云々とは、「修所断である能転の心と同じように、そのように表 (vijñapti) は設定されるが、しかし見所断である能転〔の心〕と同じように、そのように〔表 (vijñapti) が〕設定されるのではない」ということである。【問】なぜか。【答】修所断〔の心〕が間に入るからである。〔即ち〕その見所断の能転〔心〕が、修所断の能転〔心〕によって間に入られているからである。【問】どのようにしてか。【答】たとえば、「我はある」と、私は、他のもの達を納得させよう」と、先に決心してから、それから外門転であり修所断であり有尋有伺である発語心によって「我はある」等と言葉を語ることである。それゆえに「能転と同じように」云々と〔いう〕。ゆえにこのようにして、必ず見所断の能転〔心〕の直後には、まさに善、または不善、または無記なる修所断の能転〔心〕が生じる。そして、それ（修所断の能転心）の力によって表 (vijñapti) が善などになる。「そうではなくて、次のように説かれるべきである」云々とは、「そうではなくて、次のように説かれるべきである。」「他〔の心〕によって隔てられた〔即ち〕修所断〔の心〕によって隔てられた、因等起について〔即ち〕間接的な因等起について説かれたのである」という意味である。

表 (vijñapti) の三性は、随転心ではなく、能転心に従うとされる。したがって、随転心は表 (vijñapti) を起こすことこそが役割であり、表 (vijñapti) の善・不善・無記の三性を決定づける役割は能転心であることがわかる。ただし、その能転心が見所断心であれば、必ずその見所断心に続いて、修所断心が生じ、その修所断心こそが能転心となって表 (vijñapti) の三性を決定づけるとされる。すなわち、修所断の能転心こそが、その後の表 (vijñapti) の三性に対し決定的な影響力を与えると考えられている。これは『順正理論』巻36 (T29. 547c14-16)；『藏頭宗論』巻19 (T29. 865b03-05) においても、同様に主張される。

さて、この議論において、(A)「表は能転心に従う」という説をとった場合に生じる矛盾として、論難者は「欲界において有覆無記の見所断心が能転心となった場合、法相上存在が許されていない有覆無記の表 (vijñapti) が欲界に存在してしまう」と批判している。それに対しAKBh. と AKVy. は「見所断心は表 (vijñapti) の三性を決定することができないため、その場合には必ず修所断の能転心が続いて起こる」と回答し、論難されている「欲界の有覆無記の見所断心」の場合に限らず、回答の範囲を「見所断心一般」にまで広げているが、これは有部の法相を考慮した上の回答であると考えられる。というのも、見所断心によって表 (vijñapti) の三性が決定されるとしてしまうと、表 (vijñapti) も見所断であるという理解に繋が

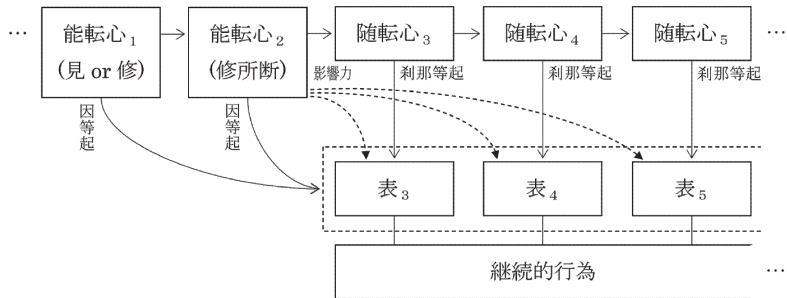
ってしまい、身語表は修所断のみであるとする有部法相と矛盾を起こしてしまうのである。これについては既に述べた通りである。

## 2. 2. 2. 世親・衆賢における表 (vijñapti) の構造

前項までに、AKBh. 以降の論書に説かれる表 (vijñapti) の構造を検討した。『大毘婆沙論』『雜心論』に説かれる構造と比べ、非常に緻密に複雑化していることがわかる。これらを要約すれば、次のようになる。

「村へ行く」などの行為は能転心によって引き起こされる。その実際の行為が遂行される間は随転心によって表 (vijñapti) が起こされ、その行為が維持される。また、表 (vijñapti) の善・不善・無記の三性は、修所断の能転心 (因等起) によって決定される。したがって、「何かをしよう」と善なる能転心によって行為が引き起こされた場合、行為が遂行されている間に随転心 (刹那等起) が不善であったとしても、その表 (vijñapti) の三性は善ということになる。また、もしも見所断の能転心によって何か行為が引き起こされた場合には、必ず修所断の能転心が間に入って生じ、その修所断の能転心 (因等起) によって表 (vijñapti) の三性が決定づけられる。この関係を図示すれば次のようになる。

【世親・衆賢における表 (vijñapti) の構造】<sup>(25)</sup>



## 3. 結 論

以上、どのように表 (vijñapti) が起こされ、時間的継続性のある行為が成立するのかについて考察した。結論は次のようにまとめられる。

1. 表 (vijñapti) と、それを等起させる心と、表 (vijñapti) によって維持される行為との関係が、詳細に説かれるのは『大毘婆沙論』『雜心論』からである。
2. 「村へ行く」などの時間的継続性のある行為は、能転心 (因等起) によって引き起こされる。随転心 (刹那等起) によって表 (vijñapti) が等起され、この行為が維持される。
3. 能転心には見所断・修所断の両者なりうる。一方、随転心には修所断心のみなりうる。



4. 能転心の善・不善・無記の三性と、随転心の三性が一致するか否かについては諸説がある。『大毘婆沙論』と『雜心論』は、両者の三性が一致すると主張する（＝三性決定説）。一方、AKBh. や『順正理論』『藏頭宗論』は、両者の三性が必ずしも一致しないと主張する（＝三性不定説）。
5. 〈三性決定説〉の場合、能転心と随転心の三性は必ず一致するため、表 (vijñapti) の三性も能転心に従うと考えられる。
6. 一方の〈三性不定説〉の場合、能転心と随転心の三性が必ずしも一致するとは限らないため、表 (vijñapti) の三性がどのように決定されるのか定義する必要がある。これに対しAKBh. と『順正理論』『藏頭宗論』は、能転心の三性に、表 (vijñapti) の三性が従うと述べている。
7. 以上より有部では、行為を起こす能転心こそが、その行為全体の価値を決定づける主要な役割をはたしていることが確認される。

なお本稿では、表 (vijñapti) のみを考察し、もう一方の無表 (avijñapti) については扱わなかった。表 (vijñapti) と無表 (avijñapti) とを統合した上での行為の構造については別稿を用意してこれを考察したい。

## Abbreviations

- ADV. P. S. Jaini ed.. *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*. Patna, 1959  
AKBh. P. Pradhan ed.. *Abhidharmakośabhāṣya*. Patna, 1967  
AKUp. *Abhidharmakośa-ṭīkā Upāyikā*. P5595 D4094.  
AKVy. U. Wogihara ed.. *Abhidharmakośavyākhyā*. 山喜房佛書林, 1971 (復刻版)  
SN. *Saṃyutta-Nikāya*. PTS  
T 大正新脩大藏經

## Bibliography

工藤道由

[1983] 「身表形色説 ―表業・無表業―」, 『仏教学』第16号 (仏教学研究會)

櫻部建

[1969] 『俱舍論の研究 界・根品』, 法藏館

櫻部建・小谷信千代・本庄良文

[2004] 『俱舍論の原典研究 智品・定品』, 大蔵出版

清水俊史

[2012c] 「パーリ上座部における行為の構造」, 『佛教研究』第40号

塚田康夫

[1985] 「俱舍論における無表の法相的性格」, 『大崎学報』第138号

並川孝儀

[2011] 『インド仏教教団 正量部の研究』, 大蔵出版

舟橋一哉

[1954] 『業の研究』, 法蔵館

[1987] 『俱舍論の原典解明 業品』, 法蔵館

本庄良文

[1993] 「シャマタデーヴァの傳へる阿含資料 ―業品(1)―」, 『神戸女子大学紀要』第26巻1号(文学部篇)

本多至成

[2010] 『正量部の業思想』, 永田文昌堂

松島央龍

[2009] 「世親・衆賢の表業論」, 『印度哲学仏教学』第24号

三友健容

[1976] 「アビダルマ仏教における無表業論の展開(一)」, 『大崎学報』第129号

[1977b] 「アビダルマ仏教における無表業論の展開(三)」, 『法華文化研究』第3号

山口益

[1951] 『世親の成業論』, 法蔵館

#### 〔注〕

- (1) ただし、このように「身表を形色」「語表を音声」とする理解は、古い段階の綱要書では明確に説かれておらず、『甘露味論』巻1 (T28. 967c18)；『心論』巻1 (T28. 812b27-c06)；『心論経』巻2 (T28. 840a03-10)；『雑心論』巻3 (T28. 888b15-22) では「身表・口表は身動・口動である」と述べられている。これらの指摘については三友健容 [1976] を参照。ただし、身表・語表が多刹那にわたるものとして積極的に認めている記述は見受けられず、またなによりこれらの綱要書は記述があまりに簡潔なため、「動」が正量部や犢子部が説くところの gati を意味していたかは不明確である。
- (2) 上座部における表 (vinñatti) については拙稿 (清水俊史 [2012c]) を参照。
- (3) 「表 (vijñapti) を捨す」とは、その行為を身語で為し終えたことを意味しているのではない。舟橋一哉 [1954 : pp. 255.7-256.4] を参照。
- (4) Cf. AKBh. (p. 20.4-15)
- (5) 中間静慮が初静慮に含まれる旨は AKBh. (p. 448.10) を参照。ただし、中間静慮を初静慮に含めるかどうかについては問題が残っている。櫻部・小谷・本庄 [2004 : p. 297 註3] は、

玄奘・真諦の両漢訳が中間静慮が初静慮に属さないものと理解している点を指摘している。

また、三友健容 [1977b: p. 185.a7-17] は『順正理論』の記述を根拠に、中間静慮にも表 (vijñapti) が存在すると指摘している。Cf.『順正理論』巻36 (T29. 545c20-21) = 『藏顯宗論』巻18 (T29. 863c01-03)；『順正理論』巻78 (T29. 765c03-17) = 『藏顯宗論』巻39 (T29. 970b28-c13)

- (6) 櫻部建 [1969: pp. 106-107 図]
- (7) AKBh. (p. 203.9-11)；AKVy. (p. 364.11-16) を参照。結論的に言えば、後で述べるように、見所断心につづいて必ず修所断心が生じ、その修所断心によって表 (vijñapti) が等起されると理解されている。引用経については AKUp. [4013] (本庄良文 [1993: p. 179.10-22]) を参照。
- (8) AKBh. (pp. 203.20-23) : tatsamutthāpitaṃ ca rūpaṃ darśanaprahātavyaṃ syāt / kiṃ syāt / abhidharṃ bādhiṭaṃ syāt / vidyāvidyābhyāṃ cāvirodhān nāsti rūpaṃ darśanaprahātavyam / (また、それ(見所断心)によって等起された色は、見所断ということになってしまおうだろう。【問】〔色が見所断であるなら〕どうようになるのか。【答】阿毘達磨が失墜することになるだろう。しかしながら明および無明と矛盾しないゆえに、色は見所断ではない。)
- (9) 本稿で扱う因等起・刹那等起とは、心そのものを意味している。また、この「等起」とは、自性・相応・等起・勝義の四点から善不善を分類するうちの一つである。AKBh. (pp. 202.5-203.9) を参照。
- (10) 『大毘婆沙論』巻195 (T27. 975c09-11) : 心有二種。謂轉隨轉。轉謂能引身語二業在彼前起。隨轉謂助身語二業與彼俱生。  
『順正理論』巻36 (T29. 547a08-10) : 身語二業等起有二。謂因等起刹那等起。在先為因故。彼刹那有故。如次。初名轉。第二名隨轉。
- (11) AKBh. (p. 204.5-11)；AKVy. (p. 366.23-27) を参照。また AKBh. (p. 205.1-2)；AKVy. (p. 367.4-6) によれば異熟生心は能転にも随転にもなれないとされる。
- (12) AKBh. (pp. 28.23-29.2) によれば、前五識は修所断のみである。
- (13) ただし衆賢によれば、修所断の意識のうち一部のみが能転心・随転心になりうるという。
- (14) 『大毘婆沙論』巻117 (T27. 610a27-29)
- (15) AKBh. (pp. 28.23-29.2) によれば、無漏なる前五識はない。
- (16) 矢印は因果関係を示している。基本的に左から右に向かって時間が進行し、上下の関係は同一刹那時の階層構造を示している。また、「無表<sub>1</sub>」とあるうち、下付きの<sub>1</sub>、<sub>2</sub>...などの数字は、其の法が存在している時を表しており、同じ数字ならばその法同士は同一時間に存在していることを意味している。すなわち「随転心<sub>2</sub>」「表<sub>2</sub>」とあれば同一刹那時に両者が俱起していることを意味する。
- (17) 二種の等起は、『大毘婆沙論』巻117 (T27. 610a05-611a07)；『雜心論』巻3 (T28. 896c21-

897a17) に説かれるが、『心論』『心論経』においては説かれていない。この等起の教理については『雑心論』巻3 (T28. 896c21-22) にある偈中で説かれるが、この偈は『心論』『心論経』には含まれておらず、法救が『雑心論』を編纂するにあたって新しく加えた偈である。この点からも、等起の教理は『大毘婆沙論』『雑心論』に至って整理されたと考えられる。

一方、表 (vijñapti) が連続して生滅を繰り返して行為を維持するという理解は、行為が遂行されているあいだ現在の表 (vijñapti) を成就すると述べている『心論』巻1 (T28. 813b09-14)；『心論経』巻2 (T28. 841a01-10)；『雑心論』巻3 (T28. 889c07-14) などの記述から確認することが出来る。

- (18) 等起に関するまとまった議論は『大毘婆沙論』巻117 (T27. 610a05-611a07) と『雑心論』巻3 (T28. 896c21-897a17) に説かれている。
- (19) 図中の破線矢印は、能転心の善・不善・無記の三性が、随転心の三性に影響を与えることを意味している。その他については前項1. 5.を参照。
- (20) 威儀路・工巧処・異熟生・化心 (通果心) は無覆無記のみである。AKBh. (p. 106.5-10)；『大毘婆沙論』巻18 (T27. 88c11-13)；『順正理論』巻16 (T29. 424c06-08)；『藏頭宗論』巻9 (T29. 817a10-11) も参照。なお、無色界に異熟生心のみがあるとされる。
- (21) さらに言えば、随転心が不善ならば別解脱律儀の無表 (avijñapti) が不善になってしまい、随転心が無記ならば別解脱律儀の無表 (avijñapti) そのものが生じないという事態に陥ってしまう。
- (22) 表 (vijñapti) は色蘊に含まれるが、色蘊は修所断のみである。AKBh. (pp. 203.20-204.3) を参照。また、有覆無記の表 (vijñapti) は梵天にのみ存在する。AKBh. (pp. 201.21-202.4) を参照。
- (23) 欲界の有身見と辺執見とは、有覆無記であるとされる。AKBh. (p. 290.13-19)；『大毘婆沙論』巻144 (T27. 740b08-12) を参照。
- (24) Cf. AKBh. (pp. 201.21-202.4)
- (25) 図中の破線矢印は、能転心の善・不善・無記の三性が、表 (vijñapti) の三性に影響を与えることを意味している。その他については前項1. 5.を参照。

(しみず としふみ 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導教員：本庄 良文 教授)

2012年9月28日受理